「国語教育研究」第六十三号（令和四年三月刊）

単元「『竹取物語』を読む」の学習指導

――主体的で対話的な深い学びを目指して――

黒瀬直美

一　はじめに

本稿は、２００９年に広島大学附属中高等学校での研究大会で行った研究授業（対象は中学1年生）での反省をもとに、さまざまな工夫を加え、練り直し、再挑戦した授業の実践報告である。

２００９年実施の研究授業では、『竹取物語』という作品のもつ魅力によって生徒は触発され、様々な疑問を持ち、読みを交流しあい、鋭い指摘をしていたものの、その読みを収斂させて、磨き合っていくという授業にはならなかった。それは「主体的・対話的で深い学び」というものを日常的に行えていないという自らの大きな弱点を痛感することとなった。生徒の書いたものを次の授業で読ませて交流する、意見を出すだけ出して、それを授業者の方でまとめてしまう、ということで満足していて、生徒同士が対話しながら思考を深め、それをどう授業に落とし込んでいくかというところまで、日常の授業で取り組めていなかったのである。このような課題に取り組むために、広島県立広島観音高等学校（前任校）の勤務十年目に研究授業を行ったその実践報告である。

二　授業の構想

『竹取物語』が「人間」を描こうとした物語であり、文学史上、「物語のいできはじめのおや」であるという観点に立ったとき、古典として『竹取物語』を「読む」ということに、大きな意味を見いだすことができるだろう。子どもの頃から慣れ親しんできた物語のルーツを知り、古典作品の奥深さを知り、さらには教訓的な説話や心情的に共感する「お話」としてではなく、作者が何らかの意図を持って書いた「作り物語」として読むのである。古典の入門期では、歴史的仮名遣い、古今異義語の学習に陥りがちであるが、さらにもう一歩、『竹取物語』の持つ特性を生かした授業ができないか、古典をただ「親しむ」だけに終わらせるのではなく、「読む」ことを通して、生徒に奥深い古典の世界に触れさせ、「読み」を深める力を付けさせることはできないか、と考えて授業を構想した。

三　学習指導の実際とその分析

（一）学習者・実施時期・配当時間・教材

広島県立広島観音高等学校　一年六組　40名

２０２１年（令和３年）１月下旬～２月上旬　８・５時間

『竹取物語』（角川文庫）のダイジェスト版（授業者編成）

絵本　『かぐやひめ』　いもとようこ・作

（二）学習指導目標

①我が国の伝統文化である古典の世界に触れ、親しみを持ち、主体的に取り組む態度を養う。

②歴史的仮名遣いに慣れ、古文の原文を語句の意味、文法のきまりに従って理解する。

③『竹取物語』に描かれている人間の姿を読み取り、他者の意見との交流を通して、『竹取物語』について自分なりの考えを持つ。

（三）単元の構造（図１参照）

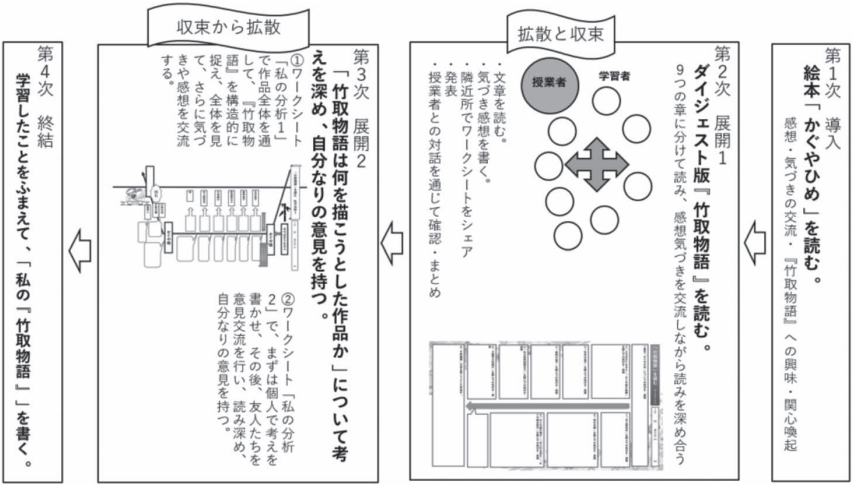
第１次　導入　０・５時間

第２次　展開Ⅰ　５時間

第３次　展開Ⅱ　２時間

第４次　終結　１時間

図１　単元構造図



（四）学習の実際とその分析

第1次　～導入～　0・5時間

【学習の実際】

①『竹取物語』について知っているか、問いかけ、生徒の持っているイメージを全体で共有する。

②絵本『かぐやひめ』を読み、感想を書く。（絵本はプロジェクターに投影。）ワークシート（図2）に気付き、感想を書く。

③教科書の「かぐや姫の生ひ立ち」を読み、冒頭部分を起想し、これから『竹取物語』について学習することを確認する。

【分析】

生徒の感想

●どうしてかぐや姫は結婚しようと言ってくれている男性に無理難題を与え、あきらめさせる理由を作ったのかと疑問に思った。おじいさんはおばあさんのかぐや姫に対する愛が溢れていると思った。

●かぐや姫を大切に育てていたから、かぐや姫は月に行く前におじいさんとおばあさんに恩返しをしていて良いなと思ったけど、悲しかった。

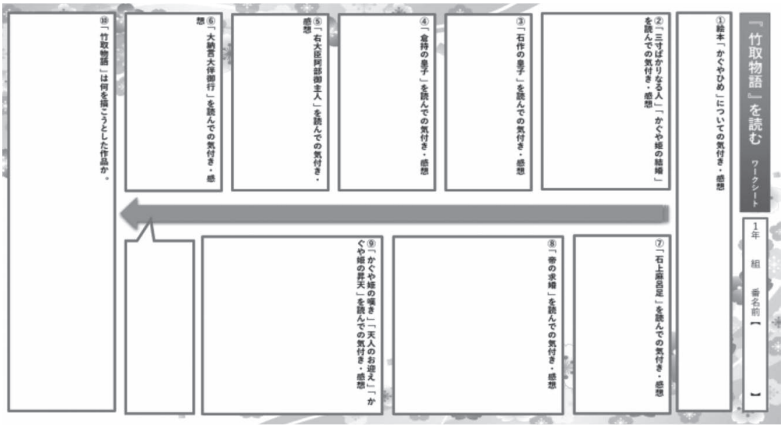
●かぐや姫が結婚を申し込んできた時、無理な要求をしたのは月に帰らなければならないことを知っていて初めから誰とも結婚する気がないんだと思いました。

●何度も読んだことがあるけれど面白い。

●かぐや姫は読んだことがあったけれど改めて読んでみて謎が

たくさんあるお話だと思いました。

図２　生徒に配付したワークシート



絵本を読んで改めて不思議で謎の多い、面白い話であるという印象を持った生徒が多い。その他、親子の愛情、別れの悲しさ、かぐやひめの結婚する気のなさを読み取ったようである。中学校での学習を思い出している生徒も多い。では古典の『竹取物語』ではどう描かれているのだろうか、と問いかけて次時に移った。

2次　～展開Ⅰ～　5時間

【学習の実際】

① ダイジェスト版『竹取物語』（図3）を配付した。『竹取物語』をすべて読ませるのにはかなりな労力を必要とするため、指導者の方でダイジェスト版を作成した。

図3　ダイジェスト版『竹取物語』表紙

第一部　竹取の翁とかぐや姫
　1　三寸ばかりなる人
　2　かぐや姫の結婚
第二部　五人の貴公子への難題と帝の求愛
　1　石作の皇子～仏の御石の鉢
　2　庫持の皇子～蓬莱の玉の枝
　3　右大臣阿部御主人～火鼠の皮衣
　4　大納言大伴御行～竜の首の玉
　5　石上麻呂足～燕の子安貝
　6　帝の求婚
第三部　かぐや姫の昇天
　1　かぐや姫の嘆き
　2　天人のお迎え
　3　かぐや姫の昇天

② ダイジェスト版（図4）では原文の左に現代語訳を補った。またところどころ、原文でじっくり読ませたいところは、現代語訳を空欄にし、生徒に現代語訳を考えさせた。指導者がゆっくり原文を読み、時々着語（じゃくご）（読みながら短い教師の感想や注意点を付け加えること）をはさみながら、補っていった。

③ 最初から読み進めていって、ワークシートに気づきや感想を書き入れさせた。発表しやすいように、まずは書いたものを周囲の四人で回し読みをし、その後、気づきや感想を発表しながら共有した。

ワークシート②「三寸ばかりなる人」「かぐや姫の結婚」を読んでの気づき・感想

図４　ダイジェスト版の一部

２　かぐや姫の結婚

かぐや姫の評判は世に広まり、身分の上下に関係なく、男達が求婚してきた。その中でも、五人の貴公子達は熱心にかぐや姫に求婚し、自分たちの愛情をアピールするために、歌を送ったり、頻繁にお屋敷を訪れたりしていた。

竹取の翁は、自分が亡くなったあとの事を考え、かぐや姫に結婚を勧める。かぐや姫は、大切に養育してもらった竹取の翁の願いを理解しながらも、自分の気持ちを打ち明ける。

かぐや姫の言はく、「なんでふさることかし侍らむ」と言へば、「変化の人といふとも、女の身もち給へり。翁のあらむ限りは、かうてもいますがりなむかし。この人々の年月を経て、かうのみいましつつのたまふことを思ひ定めて、一人一人にあひ奉り給ひね」と言へば、かぐや姫言はく、「よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、後悔しきこともあるべきをと、思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らではあひがたしとなむ思ふ」と言ふ。

① 「　」　「異世界の人」と言っても、　女の身体を持っておられます。　翁が生きている間は　こうして独身のままでいらっしゃることを望むでしょう。　五人の貴公子たちが　長い間　こちらに通って　いらっしゃることを　よく考えて、　どなたか一人を選んで結婚なさい」　「私は③（　　）から、　相手の本心も知らないで、③（　　）後悔するに　決まっていると　思うばかりです。④（　　）人であっても　愛情の深さを　確かめないままでは　⑤（　　）と考えているのです。

かぐや姫は五人の貴公子達の愛情の深さを測るために、難題の結婚条件を提示するのであった。

●かぐや姫はよくわからない人とは結婚したくないと思っていることがわかった。またかぐや姫本人は自分を「美しくない」と思い、そこから相手を信頼することができないということに気づいた。翁は本当にかぐや姫のことが大切で娘として育てていることがわかった。

●「かぐや姫の結婚」というのは今まで習ったことがなくて、どうして難題を出したのかがわかってよかったです。かぐや姫は自分のことを可愛くないと言い切っているところが謙虚だと思いました。

●かぐや姫は結婚をするには相手の愛情の深さを知る必要があるほどの純粋な心を持っていると思った。

まとめとして、「結婚に疑問」「男性を信じていない」「本当の心を知るために難題」と板書

ワークシート③「石作の皇子」を読んでの気づき・感想

●最後にかぐや姫は「まだ言い訳をするのか」と石作の皇子に呆れたから返事をしなかったのかなと思った。石作の皇子はずる賢いなと思った。

●石作の皇子は「美しい人」と結婚したかっただけで、「かぐや姫」自身のことはあまり考えられない人だと感じた。

まとめとして「うそをつく」→「信用できない」→「（かぐや姫は）冷たい態度」と板書

ワークシート④「倉持の皇子」を読んでの気づき・感想

●かぐや姫も翁をだますくらいの偽物を作ってきて、嘘の話まで長々と話し、嘘が上手な人だと思った。

●あと少しでかぐや姫をだませそうなほど、玉の枝の完成度が高いものだったのだろう。結局この皇子もだまして結婚する人だから信用できない。

まとめとして「言葉巧みに人をだますずる賢い人」「自分で探すつもりはない」と板書

ワークシート⑤「右大臣阿部御主人」を読んでの気づき・感想

●阿部御主人がせっかく大金をはたいて取り寄せてもらったのに、それは偽物で、なんだかかわいそうだなと思った。前の二人と違って偽物だと知らず本物だと思い込んでいた。かぐや姫は頭が良くて気が強いなと思った。

●自分ですら偽物と気づいていないで中国で買ってしまって、少し人のことを信じやすい素直な人だと思いました。

●かぐや姫は本当に結婚をしたくないんだなと思った。男性陣がどれだけかぐや姫のことを思っているのか理解していなくて、他人のことは余り気にしていない。

まとめとして「お金で解決しようとする人」「だまされやすい人」と板書

ワークシート⑥「大納言大伴御行」を読んでの気づき・感想

●今までの人と違って、本妻としてかぐや姫を迎えようとしていたし、嘘はつかず自分で探しに行っているいい人だと思った。しかしそれほど本気で妻にしたかった人を、最後には大悪党と思っているので、ひどいなと思った。

●前の妻と離婚してもかぐや姫と結婚しようとしていたのに、すぐに大悪党と悪口を言っていたのでびっくりした。

まとめとして「自分で行動する」「真面目」「家来大切」「正妻として迎えようとする」と板書

ワークシート⑦「石上麻呂足」を読んでの気づき・感想

●家来の意見をきちんと聞き入れる優しい人。しかし心が弱い。かぐや姫は前よりだいぶ丸くなった。

●かぐや姫が初めて「かわいそう」と同情した。自分の力で最後まで頑張っていたら死んでしまった。

●一番かわいそうだと思った。家来たちと協力していたし、自分でも取ろうとしていた。が、怪我と病気のせいで何もできない。かぐや姫が初めて「かわいそう」と感情を出していた。

まとめとして「最後まで努力」「家来を信用」「世間体を気にする」「死」と板書

④　ここで淡々と同じパターンを繰り返すために単調になっていたので、かぐや姫はどのような人物として描かれているか、意見を集約し、確認する段階を設けた（図5）。かぐや姫の人間性を多面的に捉えているようだ。ここでいったんかぐや姫の人物像を確認したことは、今までの流れに変化を出すとともに、次の帝の求婚の場面への橋渡しとして効果があった。

⑤　クライマックスに向けて、予定していた時間も無くなってきたので、ここで『竹取物語』を読む　私の分析1」というワークシート（図6）を配付し、今までの流れを確認しながら、「帝の求婚」「かぐや姫の嘆き」「天人のお迎え」「かぐや姫の昇天」を読んで気付き・感想を出し合い、読みを交流し合った。

ワークシート⑧「帝の求婚」を読んでの気づき・感想

●帝は最初は人を使ってかぐや姫に会おうとしていたが、途中から帝自らかぐや姫に会いに行こうとしており、かぐや姫にとても興味があったことがわかった。帝はかぐや姫に会ってから他の女性のところに通わなくなったことから、かぐや姫のことがとても好きだということがわかった。かぐや姫は今まで冷淡に向けられる愛をはねつけていたのに、帝とは心のこもった歌を送っていることがわかり、帝に興味が出てきたのかなと思った。

●帝はかぐや姫が冷たい態度をとっても真心を持ってかぐや姫と接していた。帝は初めてかぐや姫の本当の姿をした。かぐや姫が本当に心を開いた人。強引に連れて行こうとしたが、かぐや姫を待って連れていかなかった優しい人。

●かぐや姫も帝に歌を送ったり手紙の返事を書いている。帝はかぐや姫が地上の人でなくてもかぐや姫のことが好きである。かぐや姫が成長している。

まとめとして、帝「賢く冷静　権力を使わず　かぐや姫に優しい　本当の姿を見ても好意」かぐや姫「帝の命令を聞かない心のこもった歌　好意　人間味が増した」と板書

ワークシート⑨「かぐや姫の嘆き」「天人のお迎え」「かぐや姫の昇天」を読んでの気づき・感想

●かぐや姫は帝や媼、翁と別れることに悲しんでいて、もとよりも感情が豊かになったように思いました。月の世界の人はとても冷めているように感じました。最終的にかぐや姫の感情は天の羽衣で消えてしまって切ないと思いました。

●月の人は冷たく、かぐや姫の気持ちなどを知ろうとせず、もしかしたらそういう気持ちを持たないのが月の人なのかと思った。天の羽衣を着させるのが不思議に思った。月に帰ったら翁たちのことを全部忘れて思い出が1つもないのはかぐや姫にとってかわいそうだと思った。

●かぐや姫が翁と媼に、人間界のものではなく月に帰らないといけないと打ち明けて、翁と媼がどんなに嘆かれることかと言って激しく泣いているところから、翁と媼に感謝しており、感情がはっきりしていることがわかった。天の人たちがかぐや姫を迎えに来ているときに、翁と媼が二十年余り育ててきたのにもかかわらず「こんな汚いところに長くいる必要がない」と言っていて最悪だと思った。

これらの意見を代表的な指摘として授業者の方でピックアップし、プリントにして、図6に貼り付けてまとめとした。

【分析】

原文に触れることによって、違和感を覚えたり、共感を覚えたり、高校一年生としての素朴な感想を持ったりと、物語と対話しながら、そして他者（友だち、授業者）と対話しながら、さまざまな気づきを得ていき、さらにそれを繰り返すことによって、細部に気をつけようとしたり、自分なりの視点を大事にしたり、他者に影響されて読みを深めようとしたりする様子がワークシートを見ていてうかが

図５　かぐや姫の人物像について

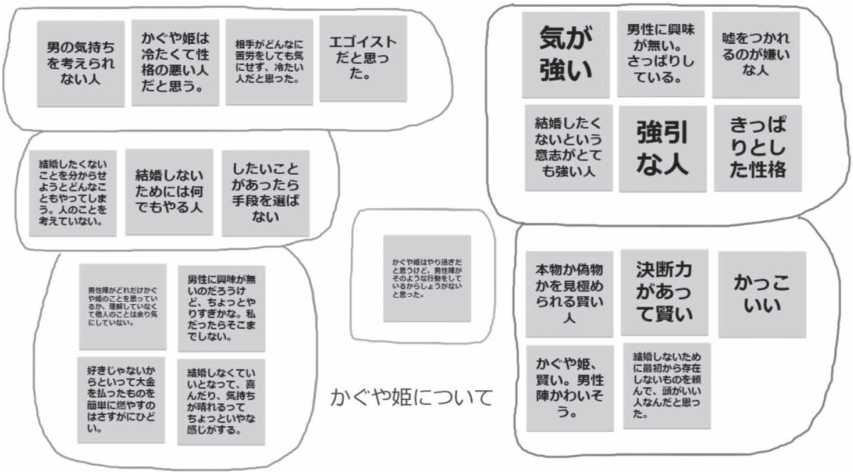
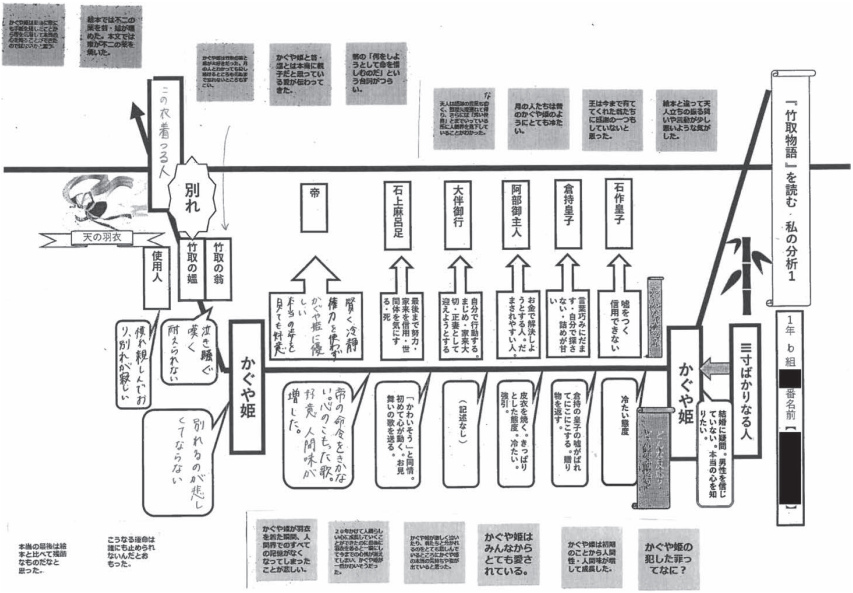


図６　ワークシートを元にした「私の分析１」



えた。また意見や気づきを収束する場面を設けて全体で確認したことでも、生徒は各自の「理解の土台」を得てまた次の捉え方へと進んでいったように思う。

第3次　～展開Ⅱ～　2時間

【学習の実際】

①　ワークシート「私の分析1」（図6）で作品全体を通して『竹取物語』を構造的に捉え、さらに気づきや感想を交流するという段階は、時間を短縮するために第2次の「帝の求婚」、「かぐや姫の嘆き」「天人のお迎え」「かぐや姫の昇天」を読んでの気づき・感想のところで同時並行で取り組んだ。繰り返しになるが、主に次のような気づきや感想が出てきた。

●かぐや姫は初期の頃から比べると人間性・人間味が増して成長した。
●かぐや姫が激しく泣いたり翁たちと別れるのをとても悲しんでいるところに、かぐや姫の本当の気持ちや姿が出ていると思った。
●本当の最後は絵本と比べて残酷なものだなと思った。
●かぐや姫は最後に帝にも手紙を残した事から、帝を信用して本当の心を知ることができたのではないかと思う。
●月の人たちは昔のかぐや姫のようにとても冷たい。

②　以上の気づき・感想を踏まえて、「『竹取物語』は何を描こうとした作品か、自分なりの考えをまとめる」という目標を掲げて、ワークシート「私の分析2」（図7）を配付した。研究授業として公

図7　私の分析2

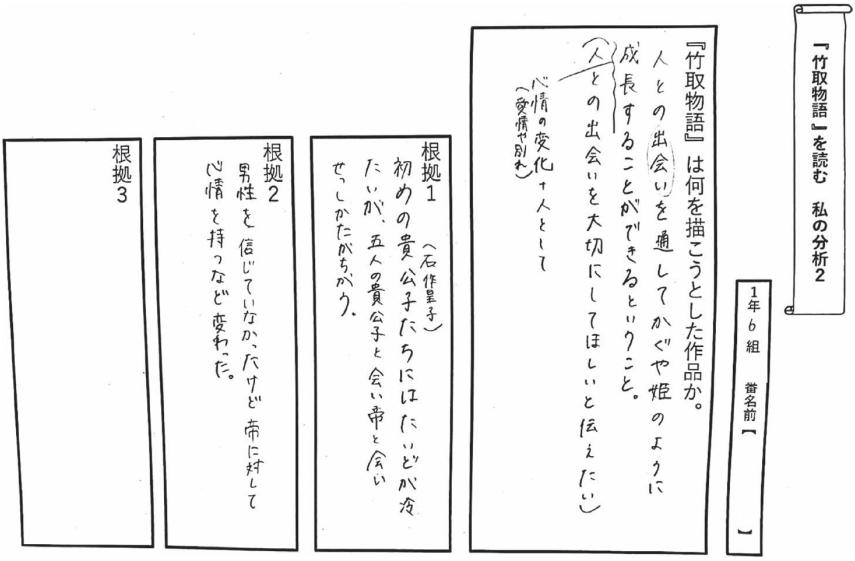
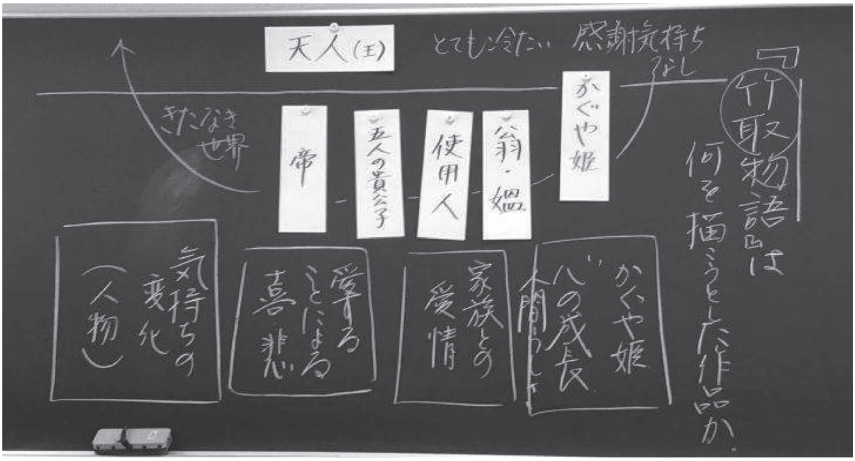


図８　研究授業当日の板書



開したのは、この②から次頁の⑨までの学習指導である。この日は２人組でペアを組んで行った。

③　まずは個人で考えを書かせた。根拠を複数挙げるように指示をした。ペアでお互いの意見を見せ合い、ワークシートに追記したり、訂正したりした。

④　その後、何人かに指名して意見を出させ、板書した。その際、必ず根拠を付けて発表するよう指示した。多くの意見は「かぐや姫の心の成長・人間らしさ」「家族との愛情」「愛することによる喜びと悲しみ」「人間の気持ちの変化」といった内容であった（図８参照）。

⑤　そこで今度はさらに深めさせるために、発問を行った。

授業者「今のところ、かぐや姫側に焦点を当てみんな書いているけれど、もっと広く見よう。なぜ天人を登場させたのですか。とても冷たいってみんな言ってたよね。さらに天人はこの世界をなんて言っていた？」

生徒「汚い世界」

授業者「そう、きたなき世界と言っていたよね。何で汚いのか分かる？隣近所で話し合ってみよう。」

生徒「なんで汚いのかわかりません。汚いと思わないんですけど……」

授業者「○○くん、わかる？」

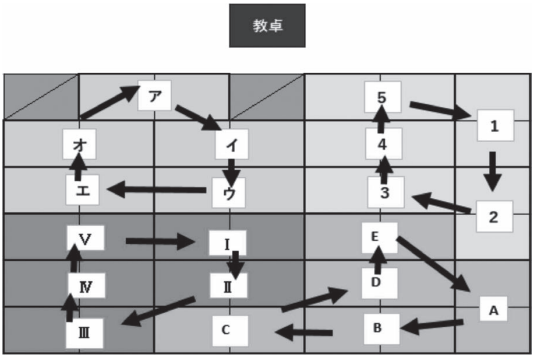
生徒「んー、汚いというわけでもない。……きれいなところもあり、きたないところもある。」

授業者「なるほど。みんなはどう思う?」
（グループで話し始める）
授業者「そして……題名に着目してみよう。絵本の題名はなんだった?」
生徒「かぐやひめ」
授業者「この作品の題は?そう、『竹取物語』だよね。どうして違うんだろう。」

⑥　生徒の目が変わったので、そのまま「じゃあ、グループで話し合ってみよう。」ということで話し合わせた。

⑦　その後、ペアでプレゼン担当一名を決定し、もう一名は取材担当として、机をローテーションしてプレゼン担当の発表を聞いて回らせた。ローテーションが終わったら、取材担当の人はプレゼン担当に他のペアの意見を報告するように指示した（図9）。

図9　座席のローテーション



⑧　他のペアの意見を参考にして、さらにペアで話し合い、その後、個人の意見を最初のワークシートに戻って作成し、クラス全体で発表した。

●人間の汚くも美しい世界。貴族が嘘をついて結婚しようとしたり、翁が、地位欲しさにかぐや姫を早く帝と結婚させようとしていたりすることもあったり、欲にまみれていた部分もあったけど、翁も帝もかぐや姫を愛していたという美しい愛があったと感じたから。
●人間世界の美しさと汚さ、愛し方の違い。五人の貴公子の中でも人によってはかぐや姫のことを愛しすぎるばかりに相手や他の人を傷つけてしまったり、自らの命を危険にさらしてしまう人がいた。帝が強引に権力を使わずかぐや姫を尊重していて、三年間手紙をやり取りすること。翁たちは本当の親ではないがかぐや姫に深い愛情を注いで育てた。
●人の感情の面白さ。人の心の奥深さ。かぐや姫と結婚するためにどんな手でも使う貴公子の心の黒い部分であったり、反対にかぐや姫のことを思い続ける帝や、大切に育ててきた翁と媼の愛情などいろいろな感情が出ているから。また人の心を持っていない天人が、わざわざこの物語に登場するから。人の本当の姿を描こうとした。

⑨　最後に、『竹取物語』は「物語のいできはじめのおや」であり、この影響を受けて、様々な作品が誕生していることを説明した。古典作品だけでなく、映画やアニメなどにも影響を与えていることを

図版で示し、私たちの大切な文化であるということでしめくくった。

【分析】

「『竹取物語』は何を描こうとした作品か、自分なりの考えをまとめる」という最初の段階では、授業者の予想通り、最後の別れのシーンにとらわれていた。もう少し広く総括的に考えさせるために、「なぜ天人が登場しているのか」「天人はこの世界をなんと表現していたか」「絵本のタイトルとの違いはなぜか」という発問を投げかけた。これらの発問によって、生徒の目の色が変わった。かぐや姫と翁、嫗、帝の心情だけでなく、もっと広く物語の構造を捉えて考え始めていた。そこで生徒にペアワークの中で語らせ、それを全体の場で生徒に発表させたいと考えた。その際に気をつけたことは、生徒の表情や身振り、手振り、ペアワークの雰囲気、机間巡視による記述の観察である。それらを通して、誰に発表させるかを考えていった。

「『竹取物語』は何を描こうとした作品か、自分なりの考えをまとめる」の二回目の書き直しでは、ペアワークだけでは、視点が広がらないと考え、ペアでプレゼン担当と取材担当を決め、取材担当のみ座席をローテーションで交代させて、情報収集させることでペア相互の情報交換を促し、多様な意見を通して自分たちの考えを磨いていく場を設けたことも効果的であった。聞く、話す、読む、書くが有機的に関連していく中で、考えも深まったように思う。最後の発表で、生徒は堂々と自分の意見を根拠を持って大きな声で発表していた。ペアワークに支えられ、クラスの仲間を信頼し、自分の意見を受け入れてもらっているという安心感が土台にないと、このような発表はできない。日常からの教室作りがいかに大切かを実感した時でもあった。

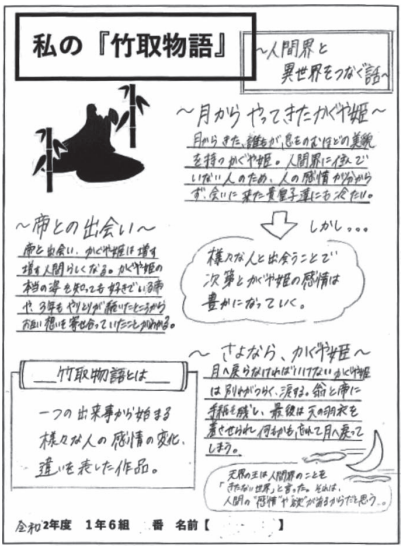
第4次　～終結～　1時間

【学習の実際】

①　学習したことをふまえて、「私の『竹取物語』」というA4版一枚の作品紹介を書く、という取り組みを行い、まとめとした。授業での取り組みを経て、各自が次年度に入学してくる一年生に、中学校時代とは違う、『竹取物語』の魅力について紹介することを狙いとした。また今まで学習してきた『竹取物語』のさまざまな魅力をクラス全体で共有することを通して、さまざまな角度から『竹取物語』を捉えさせたいと考えた。

②　実際の作品を紹介する（図10）。

図10　私の『竹取物語』生徒作品



四　成果と課題

（一）授業でのやりとりについて

本文を読み、気づきや感想を書いて、周囲で交流し、加筆・訂正して発表し、授業者との対話を経て読み深めていくという場面では、必ずしも生徒が授業者の求めているコメントをしないこともある。そんなときこそ、生徒の発表に対して、「おもしろいね」「なるほど」「それは思いつかなかった。そういう事も確かに言えるね」「〇〇くんらしい、鋭い答えだね」と様々なバリエーションを用いて評価した。生徒のコメントは表現が足りていないこともあり、鋭い指摘なのに授業者の方で見過ごすこともある。それを生徒たちとリアルタイムでやりとりしながら拾えることが理想である。そのためには、授業者の教材研究の深さが不可欠であり、さらに授業者が対話的な授業に慣れていることも必要である。用意した発問以外に、その場に応じた発問を考えつつ、生徒のコメントも評価して、すぐさまそのコメントを活かしてつなげていき、授業の進行を形作っていかなければならない。非常にスキルを必要とすると感じる。私自身、果てしないチャレンジと失敗の連続を何年も続け、現在も失敗を続けているが、そのトライアンドエラーの繰り返しで多少は成長していると感じる。このようなスキルを身につけるには、対話的な授業を実際に見てみることが一番である。

（二）対話的な授業を成立させる前提条件について

一年六組は国語総合の古典を三単位で受け持った。四月当初から、授業規律を整え、安心で安全な場を作り、授業から脱線することなく、授業に集中する中で、お互いに考えたことを気軽に話し合い、発表する雰囲気を作ってきた。前向きに取り組まない態度に対しては厳しく諭し、的外れなことを言っている生徒に対しても発言に対する姿勢を肯定的に褒め、突拍子もないことを言い出す生徒に対してもユニークな視点を大事にするように言い、失敗を許し合い、仲間を信頼しあう集団作りを行ってきた。主体的で対話的な深い学びを目指すには、生徒指導がまず根底に必要である。そして、繰り返し対話的な授業を行う中で、生徒が言葉に反応して思考する速度を速めるなど、集中力を鍛えておく必要がある。

（三）パフォーマンス課題の妥当性について

「私の『竹取物語』」というＡ４版一枚の作品紹介を、翌年入学してくる下級生に向けて書く、というパフォーマンス課題については、課題が残った。単に楽しんで書いただけで、まだ見ぬ下級生という設定ではどうしても相手意識が薄くなってしまう。パフォーマンス課題というものが話題になる昨今、「あなたは新聞記者です」「生徒会で〇〇をすることになりました」という「現実」の活用場面をいくら想定しても、所詮それは「架空」の場面であり、生徒にとっては「伝えたい」という意欲をかき立てられるものではないのではないか。パフォーマンス課題を課す場面を見直してみる必要があると感じた。むしろ、第４次を省略し、第３次の「『竹取物語』は何を描

こうとした作品か、自分なりの考えをまとめる」で授業を終わっても良かったのではないかという思いがしている。

五　おわりに

私自身、持てる力の最大を出した。本当に夢中で取り組んだ。手応えは大いにあった。

振り返ってみると、２００９年に実践したときから、十年以上が経過した。その間、日常の授業で発問を吟味したり、生徒の答えをどう評価して板書に活かすか、生徒の答えに的確に反応するにはどうしたらいいか試行錯誤したり、生徒の考えを広げたり、深めたりするにはどうしたら良いかいろいろな方法を試したりと、様々なトライアンドエラーを繰り返してきた。そしてうまくいったものをまた積み重ね、磨いてきた。

こうした日々の積み重ねこそが必要だったのだ。２００９年の実践のリベンジは果たしたと言える。しかし、まだまだ課題は多い。生徒の興味、関心を喚起する単元になっているのか、生徒の読解力を伸ばすにはどうすればいいのか、生徒の話す力を伸ばすにはどうすれば良いのか、また書く力を伸ばすにはどうすれば良いのか、パフォーマンス課題、観点別評価はどう取り入れていくのか、ＩＣＴの効果的な活用とは、などなどである。今年度は他校に異動して、また違う生徒実態の中、自分のできることを模索中である。

ともあれ、最後に、私とともに楽しく元気よく授業に取り組んでくれた広島観音高等学校元一年六組の生徒たちに、最大の敬意を払ってこの実践報告のしめくくりとする。

参考文献

・いもとようこ（二〇〇八年）『かぐやひめ（いもとようこの日本むかしばなし）』金の星社
・梅山秀幸（一九九一年）『かぐや姫の光と影―物語の初めに隠されたこと』人文書院
・角川書店編集（二〇〇一年）『竹取物語（全）ビギナーズ・クラシックス日本の古典（角川ソフィア文庫―ビギナーズ・クラシックス）』角川書店
・世羅博昭（二〇〇六年）『国語教育実践研究の展開と集積―よき師、よき仲間、よき学習者に恵まれて―』
・高橋宣勝（一九九六年）『語られざるかぐやひめ―昔話と竹取物語』大修館書店
・堀裕嗣（二〇一二年）『教室ファシリテーション　10のアイテム・100のステップ―授業への参加意欲が劇的に高まる110のメソッド』学事出版

（広島県立可部高等学校）